京都教育大学環境教育研究年報第27号　53-64（2019）

重要伝統的建造物群保存地区を学ぶための基礎文献と地形図読図課題
―愛媛県西予市卯之町および喜多郡内子町の場合―

香川貴志＊[1]

Some Basic Documents and Map Reading Exercise Learn to the Preservation Districts for Groups of Traditional Buildings: A Case of Unomachi in the Seiyo City and the Uchiko Town, Ehime Prefecture

Takashi KAGAWA

抄　録：本稿は，筆者が隔年で偶数年（西暦・和暦とも）に担当する学部前期集中科目「地理学特講」および大学院前期集中科目「地理学特論Ⅰ」の事前学習会の成果をまとめたものである。現地行動の対象地域は，愛媛県西部の西予市卯之町地区と内子町である。いずれも文化庁が指定した重要伝統的建造物群保存地区（以下，重伝建と記載）を内包している。例年と同じく，受講生は現地行動に先立って対象地域を扱った文献を一人当たり５～６本読んで，その要旨を事前学習会で紹介した。受講生がまとめた文献要旨は，当科目担当者の筆者による推敲を経て，本稿の付録にまとめた。今回の対象地域を扱った文献は，昨年度の79件（香川：2018a，2018b）と比べると遥かに少ない15件だった。しかし，受講生各々が担当する文献数は昨年より多く設定できた。また本稿では，同じく事前学習の課題である新旧地形図を使った読図演習問題作成のアウトラインにも触れた。その詳細については紙幅の都合により別稿で扱う。このように本稿は，西予市や内子町に限らず，重伝建を鍵概念として地域調査をする際に「地域の見方」を学べるよう汎用性を考えながら執筆された備忘録である。

キーワード：重要伝統的建造物群保存地区，歴史的資源，景観保全，西予市卯之町，内子町

Ⅰ．はじめに ―事前学習における文献研究の意義―

本稿の基盤となった「地理学特講」は，偶数年（西暦および和暦）の前期に開講される学部対象の科目で，同じく前期集中開講の大学院対象科目の「地理学特論Ⅰ」と現地調査を実施するなど内容の一部が共通している。受講生の詳細については後述するが，学部と大学院を合わせた受講者総数は21名であった。今年度の行程と内容は別稿で詳述する予定である。

本稿の付録には，今回の現地行動に先立つ事前学習会の際に受講生が紹介した文献研究の成果をまとめている。本稿に格納した付録の内容は，複数の受講生がまとめた所定分量の文献要旨を成績評価の材料として比較検討しつつ，科目担当者の筆者が推敲を繰り返して整えたものである。したがって，後学が当該地域の研究に取り組む場合は勿論のこと，同様のテーマで他地域に赴く際にも有用な資料として活用することができる。

文献の模索は本来受講生自らが行うべきものであるが，本学学生の大半が教職へ就くことを目標に定めているため，学術研究能力の伸長よりも職業的技能の強化に力点を置いて，対象文献は筆者が模索・選定している。選定された文献は１グループあたり５～６本の文献からなる６つの

[*1] 京都教育大学教育学部，同附属桃山小学校（併任）

グループを筆者が設けたのち，受講生は各グループを先着順で選ぶことになる。今年度の場合，各グループは最大５名の学生に担当させた。これは文献グループを分担するのではなく，各自が全ての文献（各グループ内５～６本）を読んで要旨をまとめるよう制度設計したものである。

それぞれの受講生は，文献グループの選定，文献収集，文献の精読，キーワード選定と要旨執筆，事前学習会での文献要旨の紹介を全ての担当文献について行わなければならない。こうした一連の作業は決して甘いものではない。しかし，シラバスにはそのことを明記しているため，ある程度の覚悟を決めた受講生が登録することになる。発表要旨の紹介に至るまでの全ての作業は，教材探索・研究から授業実践に至るまでの能力開発に寄与するだけでなく，決められた分量で記事の作成が求められる保護者への連絡簿，成績報告書の所見，推薦入試の必要書類，学級新聞や学年だよりなど，教育現場における書類作成で必要な基礎能力を磨ける点で意義がある。

受講生がまとめた文献要旨は、全てそのまま印刷して第２回事前学習会で配布した。受講生は各自が担当した文献から１点を選んで第２回事前学習会で文献要旨を発表したが，質疑の時間に合わせて筆者が予備調査で得た知見（自治体から刊行された報告書や資料は本稿では割愛），駒澤大学文学部地理学科橋詰研究室編（2007）に記載された卯之町におけるフィールドワークの成果を補足解説した。このような学習を経て各受講生は，他の受講生がまとめた文献要旨と自身のそれを比較すること，さらに同年代の他大学の地理学専攻学生の観察眼を学ぶことができる。

また，現地行動の際には筆者が提出物を推敲のうえ作成した文献要旨を配布し，各自の手元に残っている推敲前の原稿と照合する作業を企画した。こうした作業を経れば，受講生各自が文章の作成能力をセルフケアできる。しかし，後述するように今回は他の課題の作成に時間を要したため，文献要旨集の配布が現地実習に間に合わず，それを本稿の付録で代替することになった。

Ⅱ．文献選定の方法と文献グループの設定

今年度も例年と同じく科目担当者である筆者がCiNiiで文献検索をした。これは前章に記した本学学生の特質に配慮して，文献検索の時間よりも内容解釈に力点を置いたためである。文献検索に際しては，「卯之町」と「内子」をキーワードにした。うち「卯之町」についてはヒットする文献が限られていたため，文献が公表された時期に制限を設けずに２編を選定した。一方の「内子」は多数の文献がヒットしたが，検索システムにおけるタグ情報依存の特性から「腹腔内子宮・・・」というタイトルをもつ医学領域の産科婦人科関連文献，「地域内子ども・・・」のような社会教育関連文献が多く含まれ，さらに今回の対象地域である重伝建とは縁の薄い文献も目立ったため，当授業科目に役立つ文献の選定は例年以上に困難を極めた。

最終的に今年度は「卯之町」をキーワードとする文献を２編，「内子」をキーワードとする文献については2000年以降に公表された13編，全部で15編を選定した。その際，文献の分量は５ページ以上とし，タイトルから判断して重伝建との関係性が濃いと思われる文献に絞り込んだ。

年度当初の受講登録者が学部19名，大学院２名だったこともあり，今年度は厳選した文献を複数の受講生に担当させ，競作的な環境のもとで課題提出を促すことにした。多くの文献をカバーして取り組んだ過去数年間と比較すれば一種の方針転換である。なお、最終的な受講生数は，学部生から１名の受講辞退者が出たため学部18名，大学院２名，単位既取得で聴講参加した大学院

１名の 21 名であった。

上のようにして選定した文献には，CiNii から IR（機関リポジトリ），DOI（デジタルオブジェクト識別子）や J-Stage（科学技術情報発信・流通総合システム）に接続してフリーダウンロードできる文献が計 11 編，フリーアクセスできない文献が４編（いずれも「内子」キーワード）あった。また，文献のページ数は６ページのものと 25 ページのものが各２編，７ページのものが３編，これらを除いては，8，9，12，21，23，34 ページのものが各１編ずつあった。

こうした条件を包括的に参照しつつ，受講生各自が担当する文献をグループ化した。以下では，この作業を通じて設定された文献群を「文献グループ」と呼ぶ。それぞれの文献グループは，フリーアクセス権の有無，ページ数，想定される内容の難易度を勘案して設定されたものである。文献グループは次の通りである。なお、各々の文献グループに付した（　）内の人数はその文献グループを担当する者の数（ただし上述したように分担ではなく全ての文献要旨を担当者各自がまとめる），〇数字は本稿の付録に示した文献リストの Abstract の前に付した番号に対応しており，①と②が西予市卯之町，③～⑮が喜多郡内子町に関する文献である。

Ａグループ（大学院指定１人）：①，⑧，⑪，⑬，⑭
Ｂグループ（大学院指定１人）：②，⑧，⑪，⑬，⑭
Ｃグループ（５人）：①，②，⑤，⑨，⑩
Ｄグループ（５人）：①，②，③，⑥，⑪，⑮
Ｅグループ（５人）：①，②，④，⑦，⑪，⑫
Ｆグループ（４人）：①，②，⑤，⑧，⑩，⑬（１名が受講辞退のため実質的に３名で担当）

今回は卯之町を対象とした文献が２編だけなので，これらは学部の受講生全員が担当することとし，大学院の受講生については中等教育教員を志望する者に①，初等教育教員に合格している者（採用猶予）に②を担当させることにした。内子を扱った文献に関しては，学部・大学院ともに上述の規準に従って配分した。

Ⅲ．文献要旨のスタイルと事後教育への活用

受講生に提出させた文献要旨は，前年度とほぼ同じく字数を 188 ～ 235 字とした。これは本稿付録のもととなるテンプレートにおいて５行に相当する。このテンプレートは，既述の文献グループが確定した直後に受講生にメール添付で送信した。受講生は各自が担当する文献を収集した後に文献を読み込み，そのキーワードを選び出して要旨をテンプレートに書き込み、それを指定期日（現地実習前の最終事前学習会）までに提出しなければならない。なお，現地実習の間にランダムに選んだ 12 名の受講生にこの作業の負担感を尋ねたところ、「当初は直ぐにできると感じたものの，作業を進めるうちに字数の少なさゆえに深い読み込みが必要で、数百字の要約よりもむしろ難しかった」という趣旨の回答が９名（全体の 75%）から得られた。

逆に科目担当者の立場からみると、少なく限られた字数だから読み込みの丁寧さ、要旨をまとめるための工夫、内容の説明力を測定しやすく、数百字のレポートや要約よりも成績評価が丁寧かつ正確にできる。教員採用試験などの選抜試験においては文章の内容要約で制限字数が設けられていることが多く、コミュニケーション能力を測定する面接試験でも冗長な回答は敬遠される。

このように考えると、与えられた文章の内容を咀嚼して簡潔に要旨をまとめる作業は、学生にとって有意義な課題となり得よう。

ところで，本稿の付録は，従来の経験（香川：2013，2015a，2015b，2016，2017a，2017b，2018a，2018b）に立脚しつつ，各文献ごとに最も優れていると判断された受講生の文献要旨に筆者が推敲作業を施したものである。各々の文献の書誌情報 Reference の表記は，香川（2018a，2018b）の様式を踏襲し，地理学界有数の学術専門雑誌である『人文地理』で第68巻第1号から適用された J-Stage 対応書式としている。要旨の微調整を図る際，文献読解力，キーワード選定の的確さ，要旨の仕上がりなどを参考にして成績評価材料とした点も昨年度までと同様である。

こうしてまとめられた文献要旨は，現地行動に先立って宿舎へ送達し，現地で参考資料として配布する予定であった。しかし，今年度は現地実習をより実効的なものにする試みとして，事前に配布した新旧地形図を活用した模擬試験問題の作成や現地フィールドワークの充実を企画した。これらの準備に予想以上の時間を要したため，予定通りに上記の文献要旨を整えられなかった。それゆえ，セルフチェックを通じた推敲モデルとして本稿の別刷を受講生全員に届け，事後学習に相当する自主学習の一助としたい。受講生のうち1名は最終学年なので卒業後の住所に別刷りを送達し，その他の受講生は本稿の別刷が仕上がる新年度になっても在学しているので，別刷は学内で手渡しすることになるだろう。

なお，上記の新旧地形図を使った模擬問題の作成は，近年における各都道府県や指定都市の教員採用試験で頻出しているため，「教員採用試験での出題を想定して」という条件を付した。このような課題を与えられた受講生は，多少なりとも教員採用試験の過去問題集に触れるはずなので，課題を通じて教員採用試験に向けたモチベーションの維持・向上に資することができる。その詳細については次章で述べる。

Ⅳ．新旧地形図を活用した教員採用試験模擬問題作成の試み

高等学校で新しい学習指導要領に基づいた教育活動が2022年度から本格的に始動する。これにともない地理歴史科において長らく日本史とともに選択科目に甘んじていた地理は，その基礎的な部分が「地理総合」となって必履修化される。別稿で触れる予定であるが，現在おおむね40歳未満の中等教育教員は自身が高等学校時代に「地理Ａ」も「地理Ｂ」も学んでいない者が多く居ると考えられ，こうした教員が高等学校で自信を持って「地理総合」を教えられるかと問われれば，答えはおそらく「否」であろう。

かかる憂慮は，高等学校の社会科が1994年に地理歴史科と公民科に分けられて以降，武者（2000）によって指摘されており，地理を専門としない教員の苦手分野の一つとして地形図読図が例示された。その苦手意識の遠因は，澁澤（2000）が「地理」の要諦として強調した「地理的な見方や考え方」が，地形図読図において不可欠であるからに他ならない。周知のとおり地形図読図は，大学入試センター試験をはじめとする各種の試験で頻出する領域であり，その後も村越・小林（2003）や卜部（2004）らが地形図読図の楽しさとともに難しさについて触れ，地理教育における課題（たとえば地形図を基盤として幅広い観点に立ち論理的に推論する）の必要性を訴えた。教育現場で教師と生徒の双方が地形図読図の楽しさについて実感できるような試みも月刊「地

理」誌上で 2004 ～ 06 年に２つの連載記事となった。それは卜部と山崎が分担した「地域を考える地形図読図」（全 12 回），奥野による「明日の授業で使える地形図読図」（全 17 回）である。これらの連載記事の書誌情報は大部にわたるため本稿の文献欄では詳載を割愛して欄の冒頭にまとめて記載した。これらの詳しい書誌情報は別稿で触れるすることにする。地形図読図の技法をいかに効果的に教員が身につけ，そして生徒たちへそれを上手く伝えていくべきなのかについては，その後も卜部（2010）による論考が得られた。

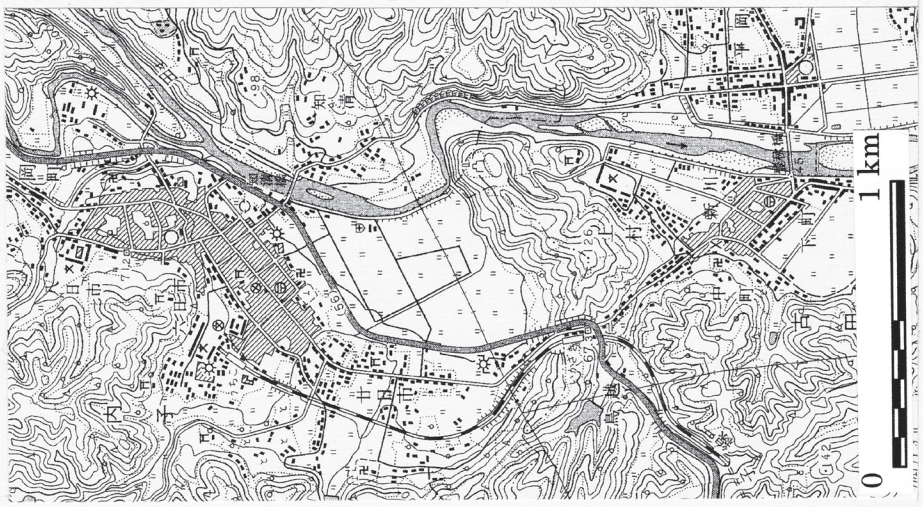
筆者自身も地形図読図は小学校社会科における「身近な地域」（ここで扱われる地図の多くは手描き地図であるが縮尺は例外なく大縮尺）の単元に端を発する「地理」の重要な構成要素と考えている。そして，教員免許講習会での使用を視野に入れて執筆した拙稿（香川：2008）を各種の講演会で常用している。その一方，地理学を専門としない教員希望の学生も多い教員養成系の教育学部では，佐藤ほか（2012）から読み取れるように，地理学専攻学生と比べれば遅れが憂慮される地形図読図能力の育成と拡充が急務である。

さて，2022 年から導入される必履修科目「地理総合」では，GIS をはじめとする情報活用と情報伝達が重視されるとともに，地図や統計などの資料を使っての考察や表現も大切な要素として強調されることになる（碓井編：2018）。情報活用が普及している現代の社会情勢を考えると，筆者は中等教育教員が GIS の基礎的技能に習熟するよりも，指摘されて久しい「地理的な見方や考え方」が要求される地図読解，とりわけ地形図などの大縮尺地図をベースにした地域情報の読解に苦戦するのではないかとの懸念を持っている。近年では国公私立を問わず高等学校の入試問題でも地形図の読図が頻繁に出題されており，各自治体の教員採用試験もその例に漏れない。そこで野外実習を伴う当科目「地理学特講」の一層の充実を図るため，事前学習課題に教員採用試験の形式を意識した地形図読図の模擬問題作成を取り入れた。なお，受講生に要求した模擬問題の形式は，大学入試センター試験と同様の客観式である。

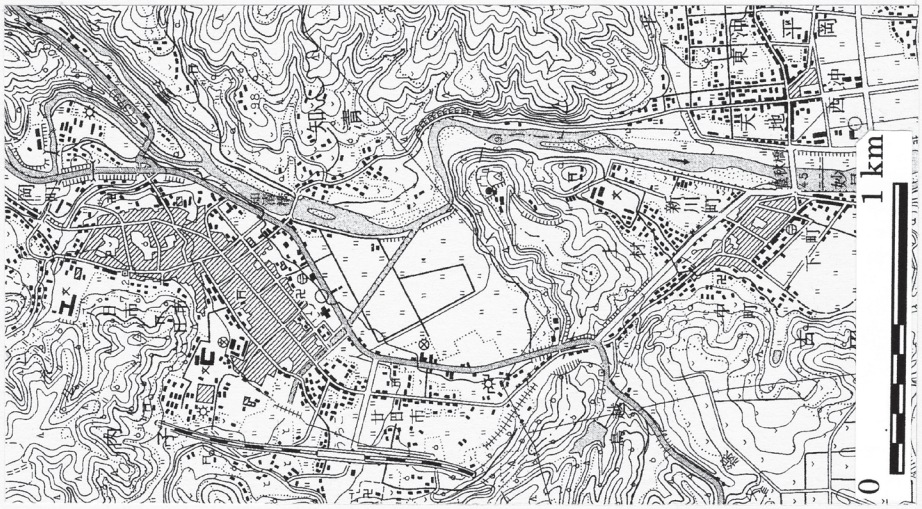
この課題で使用した新旧地形図は，西予市卯之町と喜多郡内子町それぞれの中心市街地とその周辺部を含むもので，第１図として内子町に新旧３時点の地形図で例示した。西予市卯之町に関する同様の地形図集は紙幅の関係から本稿では割愛した。これについては別稿で例示する予定である。ただし，本稿では判型との関係で止む無く図郭外に注記した倍率で原図を縮小している。第１図では鉄道と道路に関する交通路の変遷が明瞭に現れるよう図歴を綿密に調べ，使用する地形図を慎重に選定した。割愛した卯之町の地形図も国道の変遷が明瞭に分かるものを選定したので，地形図を用いた新旧比較の問題作成は容易であったはずである。なお，第１図（および同様の卯之町の地形図集）は，課題配布時には A4 用紙に収まるよう原寸大でレイアウトのうえ，現地行動直前の８月６日に受講生を集めて配布した。その際，作問の参考に活用できるように筆者が作成した模擬試験問題と解答・解説（第２図）も地形図に添えて配布した。

この宿題は現地行動３日目の朝食前に回収した。このように宿題提出を解散日の朝に設定したのは，事前のデスクワークによる予察的な作問，現地観察の成果を織り込んだ作問のいずれの方法でも対応できるよう配慮したためである。

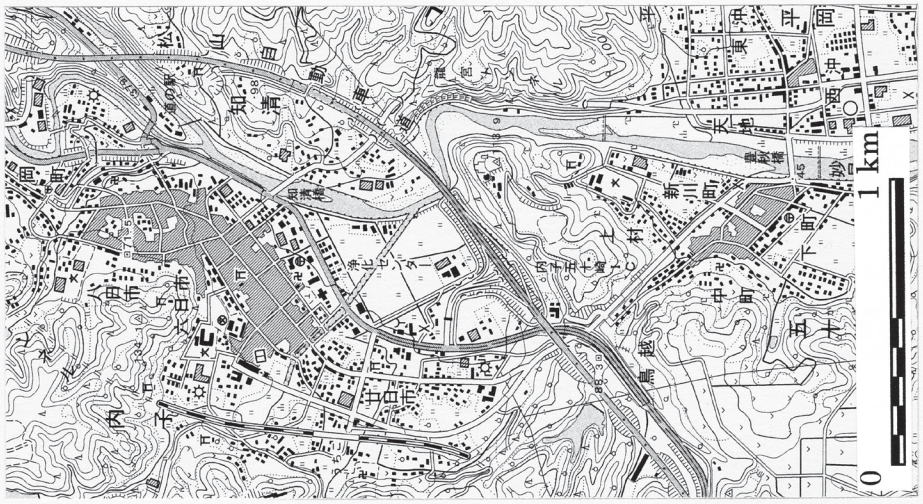
受講生から集めた模擬問題から読み取れる特徴や課題の詳しい論評については，紙幅の関係で別稿に譲る。提出物の全般的な傾向をみると，上記の例題が第１図の内子を対象にしていたため競作になるのを避けたのか，卯之町の地形図集を使って作問した受講生が過半数，すなわち課題



1/25,000 地形図「内子」
1972（昭和47）年修正測量
1972（昭和47）年3月30日発行



1/25,000 地形図「内子」
1992（平成4）年修正測量
1993（平成5）年12月1日発行



1/25,000 地形図「内子」
2010（平成22）年更新
2012（平成24）年5月1日発行

図1　喜多郡内子町中心部の新旧地形図（原図を94%に縮小）

地形図を使用した宿題の作問例

【留意事項】
・地形図は卯之町か内子のいずれか１つを選んでください。
・必ずA4用紙に記し、第１行目に学籍番号と氏名を記してください。
・選択肢は４者択一として、必ず解答と解説を添えてください。

//

学籍番号：○○○○○○　　氏名：○○○○

問　1/25,000 地形図（愛媛県内子町）を使って、下の説明文のうち**正しくないもの**を①～④より１つ選びなさい。

① 中図にみられる鉄道路線跡の一部は右図では道路として整備されている。
② 右図にみられる国道は内子の中心市街地を避けるバイパスとなっている。
③ 左図から中図にかけて町役場は中心市街地から図郭右下へ移転している。
④ 高速道路は内子と五十崎の中心市街地をともに避けて中間を貫いている。

解答・解説　正解は③です。

① 中図では明瞭ではありませんが、右図では周辺道路の拡幅と併せて鉄道路線跡が幅の広い道路として整備されているのを確認できます。正しい記述なので正解にはなりません。
② 中心市街地内の道路がかつての幹線道路（街道）であったことは、国道が中心市街地を避けるように中心市街地南東部を迂回していることから明白です。こうした例は全国各地にみられます。正しい記述なので正解にはなりません。
③ 左図では中心市街地内部に町役場の記号を確認できますが中図には内子駅から約500m東方の国道沿いに町役場の記号があります。図郭右下にも確かに町役場の記号はありますが、これは合併前（新生の内子町となる前）の五十崎町役場（現在は新生の内子町役場）です。リード文で拙速に誘導されないよう注意が必要です。正しい説明ではないのでこれが正解です。
④ 高速道路や幹線道路、また新しい鉄道路線は、高速走行ができるように可能な限り急カーブが生じないよう、また立退き保障費を抑制するために旧来の市街地を避けて建設されます。ここでもその例に漏れないコースがとられています。説明文は正しいので正解にはなりません。

図２　地形図を使った作問例

提出を要する受講生20名のうち13名が卯之町の地形図集から，７名が内子のそれから作問していた。ただ，正解となる選択肢の説明記述はまだしも，総じて誤答となる選択肢の説明記述や解説に甘さが残っていた。このような未熟さを解消していくことは，大学生を相手にした地形図読図指導の基軸の一つとなり得るだろう。もちろん，同様の地形図読図指導は，高等学校で「地理」と無縁であった初等中等教育教員の免許更新講習会でも不可欠な研修課題となる。

Ⅴ．むすび

以上のように本稿では,2018年８月に現地実習を実施した「地理学特講」および「地理学特論Ⅰ」（大学院）の事前学習，および現地滞在中の補足学習に焦点を当て，ここから得られる地理教育実践に向けた見通しを整理した。地理学がいかに現地調査を重んじるとはいえ，現地に立つ前に文献や統計でデスクワークをしておくことは不可欠であるし，その成果が現地行動と遊離したものになってはならない。つまり「事前に学んだことを現地で確認する」「目視で判明しないことは聴き取り調査で補う」「事前調査と印象が異なるものはどういう点に相違があるのかを明らかにする」などの「考動」が現地に立った時に求められる。

こうした「考動」の大切さは，地理や歴史に関する知識知を基盤にしてその深さが変わってくるのは当然である。そして，知識知を自らの引き出しから集めて有機的に結合させ，そこで考察したことがらを上手くまとめて表現していくことは，小中高に共通して新しい学習指導要領で強調されている。この知識知に立脚した表現力や説明力は，国際地理オリンピックでも一貫して重視されてきた理念であり（国際地理オリンピック日本委員会実行委員会編：2018），筆者はその充実こそが必履修化される「地理総合」の成否を左右すると考えている。

なお,文献欄に続く文献要旨は,受講生の知識知の増進効果を期待して与えた課題の成果である。これらはⅢ章に記した要領でまとめたもので，その配列は卯之町，内子の順とし，それぞれの地域内では筆頭著者の50音順（同一著者の場合は文献発行年の昇順）になっている。

付　記

本稿をまとめる基盤となった現地実習の予備調査段階から，愛媛県教育委員会事務局管理部文化財保護課文化財保護係長の土居裕司様，同・専門学芸員の石岡ひとみ様，西予市役所総務企画部まちづくり推進課課長の和氣岩男様，西予市役所産業建設部経済振興課町並み推進係主任の河野　温様，同課同係の上野優姫様，内子町役場八日市・護国町並・地域振興課の岡田誠司様，内子町教育委員会学校教育課課長補佐の中本克也様，内子町役場八日市・護国町並保存センター所長の土居正一様，同・学芸員の小野　翠様をはじめとする現地行動地域の皆様より格別のご配慮をいただきました（自治体関係者の職名は予備調査時点を含めて初対面時に交換した名刺に依拠しています）。また，駒澤大学文学部地理学研究室の橋詰直道先生からは西予市卯之町の重要伝統的建造物群保存地区でのフィールドワーク報告書をご恵贈いただきました。以上の皆様に心より御礼申し上げます。なお，末筆となり甚だ失礼ですが，2019年３月末日をもって京都教育大学を定年でご退職になる武田一郎先生に本稿を献呈させていただきます。

文　献

・対象地域に関する文献は後掲の付録を参照のこと。

・地形図の読図を演習的に取り上げた連載記事の書誌情報は別稿で触れる予定であるため本稿では割愛した。これらは，月刊『地理』において 2004 ～ 05 年に卜部勝彦が 7 回，山﨑達夫が 5 回担当した「地域を考える地形図読図」(『地理』(49(5) ～ 50(4)，全 12 回)，2005 ～ 06 年に奥野一生が連載した「明日の授業で使える地形図読図（『地理』(50(7) ～ 51(11)，全 17 回）である。

碓井照子編（2018)『「地理総合」ではじまる地理教育：持続可能な社会づくりをめざして』，古今書院 .

卜部勝彦（2004)「地理学・地理教育での地形図読図に関する検討課題」，地理誌叢，45(2)，pp. 95-106.

卜部勝彦（2010)「地理教育における地形図読図を巡る諸課題」，地図，48(2)，pp. 35-42.

香川貴志（2008)「地形図のもつ凄味の伝授―地理・地理学の間口拡大に向けての実践と私案―」，地理，53(5)，pp. 38-48.

香川貴志（2013)「東日本大震災を受けての防災教育普及のための取組―さまざまな論考の整理と三陸地域での現地検証―」，京都教育大学紀要，123，pp. 31-45.

香川貴志（2015a)「阪神・淡路大震災 20 周年を機会として復興と防災・減災について考える（第 1 報)」，京都教育大学環境教育研究年報，23，pp. 7-15.

香川貴志（2015b)「阪神・淡路大震災 20 周年を機会として復興と防災・減災について考える（第 2 報)」，京都教育大学環境教育研究年報，23，pp. 17-25.

香川貴志（2016)「懐かしさを感じる街を歩くための事前学習の記録―門司港レトロ，豊後高田「昭和の町」，別府温泉郷を事例として―」，京都教育大学環境教育年報，24，pp. 1-14.

香川貴志（2017a)「飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習会の記録（第 1 報）―飛騨古川地区と富山市街地について―」，京都教育大学環境教育研究年報，25，pp. 29-41.

香川貴志（2017b)「飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習会の記録（第 2 報）―高山市について―」，京都教育大学環境教育研究年報，25，pp. 43-60.

香川貴志（2018a)「三陸被災地で防災・減災教育を学ぶ―その事前学習における文献研究―（第 1 報)」，京都教育大学環境教育研究年報，26，pp. 25-37.

香川貴志（2018b)「三陸被災地で防災・減災教育を学ぶ―その事前学習における文献研究―（第 2 報)」，京都教育大学環境教育研究年報，26，pp. 39-46.

国際地理オリンピック日本委員会実行委員会編（2018)『地理オリンピックへの招待―公式ガイドブック・問題集―』，古今書院 .

駒澤大学文学部地理学科橋詰研究室編（2007)『愛媛県西予市における町並み・商業・刊行の現状と課題』，駒澤大学文学部地理学科橋詰研究室 .

佐藤哲夫・湯田ミノリ・S. Yongvanit（2012)「駒澤大学地理学科学生の地形図読図力」，駒澤地理，48，pp. 63-75.

澁澤文隆 (2000)「新地理教育はなぜ学び方の充実を図ったのか―地理的な知識と学び方の両立をめざす―」，地理，45(1)，pp. 20-25.

武者賢一（2000)「地理を専門としない教員の高校地理教育に対する意識―新潟県内の調査をもとに―」，新地理，48(2)，pp, 12-23.

村越　真・小林岳人（2003)「地形図読解問題解答の認知プロセス」，地図，41(4)，pp. 17-26.

付　録

「卯之町」で検索してヒットするもののうち、重要伝統的建造物群保存地区に関係が深いと思われる5ページ以上の文献を全て掲出。

①
Reference：迫垣内裕（1993）．愛媛県卯之町の町並みと町家の特徴．比治山女子短期大学紀要，28，171-177.
Key Words：町並み，建築遺構，妻入り，平入り，地方小都市
Abstract：本研究では，卯之町の中心地区である中町地区を考察対象とし，町並みの形成，その構造を分析している。対象は，江戸末期から明治初期の町家である。歴史資料の分析も踏まえた結果，現状の町並みには，19世紀初期から中頃を中心に建築年代の揃った遺構が数多く残存しており，地方小都市の特色豊かな様相を顕著に残していることが分かった。また，妻入りと平入りの町家が混在する卯之町の町並みは，四国地方ばかりか全国的にも珍しく，特異な町並み景観を形成していることが分かった。
②
Reference：前田清維・福岡実和（1998）．子どもの歴史的町並みに対する認識．愛媛大学教育学部紀要，45(1)，175-186.
Key Words：空間認識，地域学習，歴史的町並み，まちづくり，トポフィリア
Abstract：愛媛県宇和町（現・西予市）の町並みに関する地域学習が子どもの空間認識に与える影響を考察した文献である。子どもの多くは，古い町並みに好感を抱き，歴史的価値を自分なりに強く認めており，まちづくりに対する関心や意識を持っている。このように子どもたちには，地域学習の機会が多く，町並み保存の意義や学習の必要性に理解を示す。子どもたちの町並み保存やまちづくりに対する興味や関心を喚起していくには，学習機会を多く設け，美観運動等を兼ねたボランティア作業の啓発も必要である。

「内子」で検索してヒットするもののうち、重要伝統的建造物群保存地区に関係が深いと思われる5ページ以上の文献で2000年以降に発行されたものを全て掲出。

③
Reference：秋元一秀・竹下輝和（2000）．町屋屋敷の奥行方向の変容過程からみた内子町八日市及び六日町の空間構成の特徴．日本建築学会計画系論文集，65(527)，99-106.
Key Words：単路型在郷町，奥行き，後背地，地租改正，町家屋敷地，分筆
Abstract：近世初期には八日市や六日町の形成や変容に大きな影響を与えなかった屋敷地の奥行きは，町の成立以降は当地の生業や生活に対応して変容を遂げていくようになる。このことは，単路型在郷町の空間構成を考えるうえでも重要である。明治初期には江戸期からの町家屋敷地の分筆が行われ，後背地の所有者が変わることもみられた。明治以降は，主要道路を中心として周辺への屋敷地の拡大がみられるようになる。分筆された後背地は，町家になることがある一方，製蝋業を支えるための農地になることもあった。

④
Reference：井上淳一（2009）．「平成の大合併」における財政状況とまちづくり計画．財政と公共政策，45，41-47.
Key Words：選択と集中，平成の大合併，持続的発展，財政難，地域経済，地域自治システム
Abstract:愛媛県は，2001年より県内の市町村の自主的･主体的な合併を積極的に支援することにした。旧内子町，旧五十崎町，旧小田町は2005年に合併し，新しい内子町が誕生した。合併したとはいえ財政状況が改善するわけではなく，計画的な事業選択と健全な財政運営が求められている。新しい内子町では「町並み，村並み，山並みが美しい持続的に発展するまち」を目指し，①人口減少に歯止めをかける，②地域経済の活性化，③安全安心の地域自治システムの確立を基盤として10のプロジェクトが立ち上げられた。

⑤
Reference：岡田文淑（2008）．誰のための町並み保存か―愛媛県内子町―．月刊自治研，50(581)，57-62.
Key Words：町並み保存，歴史的環境，観光振興，地域住民，スクラップ＆ビルド，引き算型まちづくり
Abstract：本来，町並み保存地区にある土地，構築物の全ては地域住民の私的財産であり，努力によって形作られたものである。しかし，今日ではそのような地区は観光資源の一部となっている。例として愛媛県内子町を挙げ，経済成長に伴う開発により観光産業は発展し，土地と住民に新産業としての期待と夢を提供した。しかし一方では，長年築き上げた歴史的環境が観光振興により破壊される危険があると筆者は考え，地域住民が主役になれる

新たな地域づくりこそが地域の歴史や文化を継承するための基盤ではないかと提唱している。

⑥
Reference：鈴木　茂（2000）．愛媛の地域づくり・産業おこし―愛媛県喜多郡内子町の場合―．松山大学論集，12(5)，97-119.
Key Words：歴史的町並み保存，行政主導型，中山間地域，過疎化，高齢化
Abstract：内子町の地域づくりと産業振興の特徴は，歴史的町並み保存事業を通じてノウハウが蓄積され，それが自治体職員や地域住民によって共有され，内発的な活動につながっているところにある。歴史的町並み保存，大正期に建設された芝居小屋「内子座」の修復保存などの取り組みにより，内子町は「白壁と木蝋のまち」として社会的評価が定着し，観光客が増加している。しかし，町内に宿泊施設が少ないため，地域経済に対する波及効果が大きくないという課題を抱えている。

⑦
Reference：鈴木　茂（2006a）．内子町における地域づくりと観光振興政策（1）．松山大学論集，18(1)，41-65.
Key Words：中山間地域，内発的，町並み保存，産業振興，重要伝統的建造物群保存地区
Abstract：中山間地域は地域社会崩壊の危機に直面している。このような条件不利地域における内発的な地域づくりや産業振興の重要性は早くから指摘されてきた。内子町における地域づくりの特徴は，地域づくり事業の統合性と継続性にある。これらが円滑に進んだ要因の一つは計画性である。また，住民主体の地域づくりに早くから取り組んだことも見逃せない。さらに，女性や高齢者，農家による自発的取り組みもみられる。学習と人づくりを基盤に据えた内子町の地域づくりの基本的枠組みが随所にみられる。

⑧
Reference：鈴木　茂（2006b）．内子町における地域づくりと観光振興政策（2）．松山大学論集，18(3)，13-33.
Key Words：地域づくり，観光客，消費支出額，観光振興政策，マスツーリズム
Abstract：観光客に対してアンケート調査を行い，増加した観光客の実態を明らかにし，内子町が町並み保存事業で直面している課題を明らかにした。調査の結果，内子町はマスツーリズムの対象となり，滞在時間が短く，消費支出額が少ない傾向にあること，観光客の増加に伴い生活環境が悪化するなど，生活者と観光客の齟齬が生じていることを知り得た。結果を踏まえ，観光振興政策の課題として，自動車対策や案内表示など7点を指摘したうえで，トイレや休憩所の整備という中高年者対応や内子座の活用，生活者と観光客の共存など11点の改善点を明示した。

⑨
Reference：鈴木　茂（2015）．内子町におけるコミュニティの再生―主体形成と学習―．松山大学論集，27(3)，1-34.
Key Words：住民主体，町並み保存，学習活動，コミュニティ，民度
Abstract：内子町における最初の大事業は，町並み保存事業であり，町づくりの主体的条件が町並み保存事業に取り組む過程で形成された。また，その事業は学習活動を他の多様なまちづくりに継承させる契機となった。住民主体とはいえ自治体職員の支援は不可欠で，他方で町並み保存事業は住民の同意なしには進められない。このように住民と行政の協働が住民主体の町づくりを支えている。こうした協働の精神的基礎は，行政からの提起を受け止めそれを磨き上げた歴史的な民度の高さによるところが大きい。

⑩
Reference：瀧山幸伸（2013）．追憶の町並み（10）愛媛県内子町．公評，50(2)，96-101.
Key Words：在郷町，町おこし，木蝋，エコロジータウン
Abstract：江戸から明治にかけて木蝋と和紙で栄えた内子町は，町並み保存運動を村並み保存運動に継承させ，さらにエコロジータウンの町おこしを展開した。今日の内子町には当時の姿が色濃く残っており，1980（昭和55）年に条例が出来て以降，町並み保存に対する方向性は一貫している。現在，景観条例によって拘束力の強いコアの部分は守られている。その周囲のソフトな部分については，内子町内での宿泊客を増やし，リピーターになってもらうことで,「町と村」の両方で懐かしさを感じさせる内子町の良さが徐々に浸透していくと考えられる。

⑪
Reference：土岐　寛（2006）．愛媛県内子町の歴史的町並みの形成と保全．追手門経済論集，41(1)，423-434.

Key Words：上芳我邸，町並み保存，観光行政，景観行政，修景事業
Abstract：愛媛県内子町は，八日市・護国地区が重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に指定され，地域住民との関係を含め，良好な保全の実績がある地域である。この研究は，内子の歴史的町並みの特質と保全の流れを概観したものである。この地区では，古いものを残すだけでなく，それを基軸にして住民にとって住みよい町を作り上げるという発想がある。この理念をもとに，町並みに合致したデザインと外観で地区を修景し，建物内部は現代化して日常生活との調和を保ちつつ，重伝建に相応しい町並みが復元されている。

⑫
Reference：中岡紀子（2009）．まちづくり型観光振興．財政と公共政策，31(1)，25-31.
Key Words：観光振興，町並み保存，内子スタイル，木蝋資料館上芳我邸，内子座
Abstract：内子町の観光振興は，1982（昭和57）年に国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けたことで方向づけられた。町並み保存地区では,土地の歴史と文化を再認識して,物語を伝承させていくことも取り組まれた。木蝋生産の上芳我邸のような拠点整備は，やがて内子座などにも波及し，内子座は町民による町民のための文化活動（内子スタイル）により復興を遂げた。現在,内子町は観光資源を体感し,移動する喜びを創出するために「歩く」ことを軸に置いたヒューマンスケールの観光地を目指している。

⑬
Reference：長野麻里子・西山徳明・谷　正和（2012）．伝統的建造物群保存地区における見直し調査に基づく保存地区の設定基準の考察―内子町八日市護国伝統的建造物群保存地区を事例として―．芸術工学研究，17，1-9.
Key Words：町並み，景観コントロール，保存地区，設定基準，見直し調査
Abstract：本研究では，内子町八日市・護国地区を事例に，地籍の復元，土地利用図の作成，時代ごとの家屋様式や景観的特徴の分析を行い，空間的特性が整理された。保存地区の問題点として，敷地を分断するような保存地区の設定や大正期・昭和初期に形成された地区が含まれていないこと，範囲外の景観コントロール等の対策など4点があげられた。これらを踏まえ，検討されるべき保存地区の範囲を示すとともに，保存地区範囲の設定基準となるべき5項目の提案もなされた。今後は保存地区の設定基準となるべき項目の一般化が課題であろう。

⑭
Reference：永野征男・中山路子（2011）．愛媛県内子町における伝統産業と町並み保全との関係について．日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要，46，49-73.
Key Words：町並み保存，保存事業，まちづくり，伝統産業，歴史的町並み
Abstract：景観保全が各地で注目され，保全されるべき景観の対象が住民の日常生活へも拡大し，保全地区内で暮らす住民の日常生活の担保という新たな課題が浮上してきた。本研究では，重伝建地区が内子町に与えた影響を解明している。地区住民の中には，観光客の増加で日常の生活環境が悪化するとの意見を持っている人がいる。さらに，観光客が近隣の商業地に経済的効果をもたらすということも少ない。しかし，地区住民は町並みに対して一定の評価をしており，観光客の増加が町民の地域に対する愛着を生み出していることが確認できる。

⑮
Reference：畑野亮一（2009）．歴史的町並み保存事業の概要とその効果および今後の戦略．財政と公共政策，31(1)，10-16.
Key Words：観光公害，外部資本，空き家，高齢化，補助制度
Abstract：町並み保存によって交流人口の増加，町の知名度およびイメージの向上等の波及効果が期待できる。しかし，保存物件として指定された建物の修理が進む一方で，保存地区から外れた，または指定されなかった伝統的な建造物は急速にその姿を消している。また，地区住民の高齢化やそれに伴う空き家の増加，観光店舗の増加と外部資本の流入など，保存地区の将来が不安視される要素も浮かび上がっている。さらに，内子で暮らしながら恵まれた歴史的環境をどう次世代に引き継いでいくのかが喫緊の課題となっている。